



冬の旅～フォルテピアノで贈るシューベルティアード～ 20周年記念レクチャーコンサートシリーズ「フォルテピアノとその時代」第1回 プロローグ



当館は4月に開館満20年を迎えます。4月からの1年間を20周年の年として、様々なイベントを企画していますが、そのひとつが、当館所蔵の19世紀のピアノによるコンサートです。

およそ19世紀前半までのピアノは、現代のピアノと区別するために、フォルテピアノと呼ばれています。当館にはウィーン、ロンドン、パリのフォルテピアノが多数所蔵されており、これまでもコンサートやCD録音で演奏され、多くの聴衆を魅了してきました。今年は3月から、それらのフォルテピアノ5台と、ピアノの発明者であるクリストフオリのピアノ（復元品）、それに1911年のスタインウェイ製フルコンサートグランドピアノを使って、シリーズで6回のコンサートをするという、豪華な企画が予定されています。

その第1回が3月11日（水）に行われました。1820年頃ウィーンの名工コンラート・グラーフ作と伝えられるフォルテピアノを使い、プログラムはシューベルトの即興曲D899より第3番と第4番、それに歌曲「冬の旅」全曲です。演奏はフォルテピアノに平井千絵さん、バリトンに近野賢一さん。

即興曲のどこまでも甘く切ない夢見るようなロマンティズムで前半は終了。グラーフのピアノの珠の

ような音色が甘美な世界を作りました。グラーフのピアノは作曲家ロベルト・シューマンが妻クララにプレゼントしたほど、当時のウィーンの最高級のピアノです。今回のピアノが製作された1820年はまだシューベルトが生きていた時代ですから、まさにシューベルトの時代の響き。

後半は「冬の旅」全曲、70分間の演奏です。フォルテピアノの響きは、音量、音質ともに人の声と驚くほどマッチします。現代のピアノは19世紀のピアノの何倍も大きな音がしますが、人の声は19世紀と変わってはいないので、現代のピアノで歌うのには本当は無理があるのです。フォルテピアノの繊細な響きは声を決して邪魔せず、詩のいたるところに散りばめられた過去の夢の世界に聴衆を誘いました。甘美とは全く逆の厳しいロマンティズムが表現されました。

「冬の旅」を全曲通して聴くことは滅多にありませんが、全曲を聴くと、詩人ミュラーと作曲家シューベルトの言わんとすることがよくわかります。まさに人生を語るコンサートでした。

日 時：平成27年3月11日（水）19:00～21:00
会 場：楽器博物館 天空ホール
出 演：平井千絵（フォルテピアノ）、近野賢一（バリトン）
入場者：73人

講座「フォルテピアノとその時代（全2回）Ⅰプロローグ「シューベルトの夢」



日 時：平成 27 年 3 月 4 日（水）19:00 ～ 20:30
会 場：楽器博物館 展示室
講 師：筒井はる香（同志社女子大学、神戸女学院大学非常勤講師）
受講者：31 人

3月4日（水）、講座「フォルテピアノとその時代」の第1回を開催し、講師に筒井はる香さんをお迎えしました。

今回のテーマは「シューベルトの夢」。F.シューベルトの歌曲「冬の旅」を取り上げました。W.ミュラーによって書かれた詩には「夢」についての描写が多く見られます。シューベルトが、その「夢」にどのような音楽をつけたのかということフォルテピアノを通して考えていきました。また、シューベルトの生きた時代（19世紀初頭）のフォルテピアノがどのような楽器だったのか、どのように評価されていたのか、様々な文献を見ていきました。この時代はフォルテピアノの構造（特にペダル、音域など）が大きく変化した時代でした。ペダルは6、7本付けられているものも多く、「ピアノストップ」「ファゴットペダル」など今では使われていないものが見られます。それらがどのように使われていたのか展示されている楽器を使い、実演をしてくださいました。文献によると、効果的に使うことを評価する一方、「滅多に用いてはならない」という否定的な考えもあったようです。鍵盤楽器を自由自在に歌うように弾きたいという人々の考えから、様々な工夫が生まれ、様々な変化を経て、今のピアノの姿になったということを感じました。

3月11日（水）のレクチャーコンサート「冬の旅～フォルテピアノで贈るシューベルティアード～」に先駆けて行われ、より楽曲理解の深まる講座となりました。

第167回 レクチャーコンサート 「時代を彩るオーボエたち～16世紀から21世紀へ～」



日 時：平成 27 年 3 月 25 日（水） 19:00 ～ 21:00
会 場：楽器博物館 天空ホール
出 演：三宮正満（オーボエ）、水永牧子（チェンバロ）
入場者：91 人

3月25日（水）、オーボエ奏者の三宮正満さんとチェンバロ奏者の水永牧子さんをお迎えし、オーボエの歴史を探るレクチャーコンサートを開催しました。

オーボエは葦でできた2枚重ねのリード（ダブルリード）を使う楽器で、日本を含むアジアにも同じ仕組みで音を出す楽器があります。まずは中東で使われている「ズルナ」でトルコの軍楽隊の音楽「ジェッディン・デデン」が演奏されました。軍楽隊の音楽というだけあって、音量も大きく、迫力のある音でした。次に中国の「スオナ」、日本の「箏篋（ひちりき）」といった民族楽器。そしてヨーロッパのショーム、バロックオーボエ、オーボエダモーレなど、時代を追って現代のオーボエまで順に紹介されました。形は似ていても時代や作られた地域によって音色が違うことや、改良が加えられて姿が変わっていく様子がよくわかりました。今回使用した17本の楽器は全て三宮さんの楽器で、この日のために持ってきていただきました。バロックオーボエではC. Ph. E. バッハ作曲「ソナタ ト短調 Wq. 135」、1840年製作のロマンティークオーボエではバジ作曲「リゴレットによる変奏曲」、現代のオーボエではモリコーネ作曲「ガブリエルのオーボエ」といったように、楽器に合った曲が演奏されました。数百年に渡るオーボエの変遷を2時間に凝縮した、とても内容の濃いコンサートとなりました。

日本の魅力再発見!! 雅楽 その③ ～「弾きもの」と「打ちもの」～

前号の「吹きもの」に続き、今回は「弾きもの」と「打ちもの」から楽器を紹介します。

「和琴（わごん）」はその名の通り、雅楽の中では数少ない日本由来の楽器です。そのため、和琴は宮内庁や伝統儀式を受け継ぐ神社で行われる「御神楽（みかぐら）」などの「国風歌舞（くにぶりのうたまい）」で使われます。演奏の際は箏とは違い、座って弾くだけでなく、写真のように立って弾くこともあります。



和琴の立奏（春日大社おん祭）

雅楽の中でも、楽器だけの合奏「管絃」で使われる弾きものに、琵琶と箏があります。「楽琵琶」「楽箏」とも呼ばれるのは、他の琵琶（平家琵琶、薩摩琵琶など）や箏（山田流、生田流の箏など）と区別するために、雅楽では単に琵琶、箏と呼びます。管絃ではどちらも旋律を奏でることはなく、決まった音型の繰り返しで拍をきざむ打楽器的な役割をします。雅楽の合奏では主役になりませんが、時を経て日本の文化と深く結びつき、それぞれの楽器を中心とした音楽ジャンルが生まれました。

さて、雅楽にはいろいろな演奏の種目があることを前々号で紹介しましたが、中でも舞楽はさらに中国系の「唐楽（とうがく）」＝「左方（さほう）」と、朝鮮半島系の「高麗楽（こまがく）」＝「右方（うほう）」に分けられます。

左方の多くは男性的な力強い動きの舞で赤系の装束、対して右方は女性的な舞で青系の装束を用い、楽器の編成も異なります。



楽琵琶

左方の舞楽と管絃でのみ使われるのが「鞆鼓（かっこ）」です。鞆鼓は指揮者がいない雅楽の合奏において、曲の進行とテンポの変化を統率するリーダー的な役割を持っています。管絃では、鞆鼓の奏者が桴（ばち）を持ってかまえると準備 OK の合図となり、龍笛の奏者が吹き始め曲が始まります。



鞆鼓

それに対し、右方で使われるのが「三ノ鼓（さんのつづみ）」です。砂時計型の胴を鉄の輪に張った膜面で両側から挟むようにして、調べ緒（しらべお）という紐で締め上げています。このような形の雅楽の太鼓は、古くは大きさによって、一鼓、二鼓、三鼓、四鼓の種類がありました。これが庶民に取り入れられ変化し、室町時代に完成されたのが、能楽などで使われる大鼓（おおつづみ）や小鼓（こつづみ）です。



三ノ鼓

また、舞楽の右方、左方はそれぞれ陰と陽とされ、陰陽思想の考え方も結びついています。それが最もよく表れているのが「大太鼓（だだいこ）」です。本格的な舞楽で舞台後方の左右に置かれます。鼓面が直径約2メートル、高さは装飾を含め



大太鼓（左方）

約6メートルあり、叩くと地響きのような音がする巨大な太鼓です。左方と右方では装飾の模様の違いがあります。左方の大太鼓には鼓面に三巴が描かれ、火焰（かえん）飾りには昇龍の彫刻。上に伸びる棹の先は日輪です。対する右方の大太鼓は鼓面に二巴、火焰飾りは鳳凰で棹の先は月輪になっています。陰陽思想とは陰と陽の気であらゆる物が形成されるという宇宙観ですので、舞楽は宇宙を表現していると見ることもできます。

ミュージアムサロン 「フルート音楽の魅力～麗しき旋律～」



フルートのための作品を紹介するミュージアムサロンを行いました。J.S. バッハ、クーラウ、サンカンという異なる時代の作曲家の作品を取り上げ、時代によってどのように作風が違うのか聞き比べていただきました。「普段クラシックを聴く方はどのくらいいらっしゃいますか？」という質問に対し、手を上げてくださったのはほんの数名でしたが、お客様は最後まで真剣に聴いてくださいました。これを機に少しでもクラシック音楽に興味を持っていただけたら幸いです。

日 時：平成 27 年 3 月 21 日（土） 14:00、15:30（各 30 分）
会 場：楽器博物館 天空ホール
出 演：鈴木未希香、松尾圭子（当館職員） 入場者：166 人

博物館日誌

3/4（水）講座「フォルテピアノのその時代」プロローグ：シューベルトの夢
19:00 展示室 講師：筒井はる香 受講者：31 人
3/11（水）レクチャーコンサート（フォルテピアノとその時代 第1回プロローグ）
「冬の旅～フォルテピアノで贈るシューベルトの時代～」
19:00 天空ホール 出演：平井千絵、近野賢一 入場者：73 人

3/21（土）ミュージアムサロン 「フルート音楽の魅力～麗しき旋律～」
14:00、15:30 天空ホール
出演：鈴木未希香、松尾圭子（当館職員） 入場者：166 人
3/25（水）レクチャーコンサート
「時代を彩るオーボエたち～16世紀から21世紀へ～」
19:00 天空ホール 出演：三宮正満、水永牧子 入場者：91 人

